

## 〔編集後記〕

本号も多くの寄稿を得て、読み応えのある内容となった。歴史、伝統を背景に、多様に展開される現代医学の先端に触れ、本誌寄稿者、読者の活躍に改めて思いが致された。

本誌のますますの発展に寄与すると思われる朗報が一つあるので、それをお伝えしたい。この度、本誌が過去12年のバックナンバーも含め電子化されることになった。国立情報学研究所は、大学等の研究機関で刊行される紀要等の電子化を推進する事業を進めているが、これに本誌「千葉医学」も採択された。今後、本誌は、ネット上に公開され、英語の論文であれば、全世界に読者を持つことになる。まことに喜ばしいことである。ただ、その形式は、少なくともしばらくの間は、印刷された冊子体の各ページをスキャナで取り込んだPDFのスタイルになると思われ、文字・画像情報をHTMLとPDFの両方の形で提供する本格的な電子ジャーナルとは異なるものである。

そこで提案なのだが、本誌も本格的な電子ジャーナル化を考えてはどうだろうか？ 特に、英語論文の部分だけでも独立させて、世界に発信したいものである。学術雑誌のオンライン化の効用については、本誌本年2号の共著論文でも述べたが、オンライン化により2～3点のインパクトファクター（IF）を有する雑誌に衣替えることはさほど困難なことではない。本誌のように、しっかりした財政基盤を有する雑誌の場合、オンライン版を全面無料公開Free accessとすることにより、全世界に読者を獲得できる。これは、掲載論文が引用される可能性を高めることにつながり、単位年当たりの被引用回数に立脚するIFを上昇させることにつながる。

ご存じの様に、欧米の著名な学術雑誌の中には、学会、出版社の発行するものに加えて、大学、研究機関等の出版局から刊行されるものが数多くある。これも本年2号の論文で紹介したことであるが、日本の生命科学系の雑誌で最もIFの高い雑誌は千葉県にあるかずさDNA研究所が発行するDNA Researchで、2004年にIF 4.596を獲得している（ちなみに2位の日本分子生物学会刊行Genes to Cellsが4.064、日本生化学会刊行Journal of Biochemistryが2.292である）。我々の当面の良い目標になろう。

本年1号の編集後記で白澤教授も紹介したように、今でも本誌は事務局の高橋さんの努力により一部が電子化され、千葉医学会の品のいいホームページ<http://www.c-med.org/>から内容を見ることができる。基盤は既にできている。

これも、国立情報学研究所での本誌電子化に向けてのやり取りの中で再認識したことなのだが、本誌の歴史は非常に古く、前身の「一高志林」17冊に始まり、「千葉医学専門学校校友会雑誌」54冊、「千葉医学専門学校雑誌」76冊、「千葉医学会雑誌」約300冊、「千葉医学雑誌」約200冊と合計600冊以上の刊行を見ている（附属図書館・阿藪品治夫氏調べ）。先人の営々とした努力の重さを感じさせずにはおかない。今後の発展の貴重な礎としたい。

大学法人化を受け、厳しさだけが指摘され委縮しがちであるが、発展できる芽はいくらでも有り、多少の創意工夫の積み重ねにより長い間には大きな違いを生む。日頃のささやかな努力を惜しまぬよう自戒したい。

（編集委員 滝口正樹）